ラブ・オブ・マネー

Love of Money

坂 本 幹 雄
Mikio SAKAMOTO

1. ラブ・オブ・マネー
2. アリストテレスの蓄財術批判—『政治学』第1巻
3. 金銭欲は諸悪の根源—『聖書』の教義
4. ヒュームの貨幣信念論
5. マーシャルの『貨幣と成功』
6. フロイドの貨幣の精神分析
7. auri sacra fames—『貨幣論』第35章
8. 貨幣への深層心理学的調査—ケインズとフロイド
9. 貨幣の意識革命—「ロシア管見」
10. 資本主義の本質としてのラブ・オブ・マネーの本能—「自由放任の終焉」
11. 「われわれの神」—「わが孫たちの経済的可能性」
12. ラブ・オブ・マネー論の系譜としての『一般理論』
13. 流動性選好と現在本能—『一般理論』第12章
14. マネー・メーキング・パッション—『一般理論』第24章
15. まとめ—ケインズに収束して
16. エピローグ—世紀末の貨幣思想

1. ラブ・オブ・マネー


それでは流動性選好説の1930年代前半の形成・確立以前には、それはまったく何の下地もなかったのか、ある日突然発明されたのかといえば、もちろん、天才の腕の部分があるのかもしれないが、おそらくそうではないかろう32。実はケインズは流動性選好説の確立に先立つ1920年代にはその源流ともいうべき概念を多用していた。それがラブ・オブ・マネー love of money の概念である40。

ケインズ研究の中でラブ・オブ・マネーの概念はどのように評価されているのであろう
か。ラブ・オブ・マネーを重視した所説はいくつかあげることができる。まずスキデルスキー（Skidelsky, 1992, pp. 425-426）は、フォーマルな分析体系を用いながらも、ケインズの著作はまったくモデル化されていない歴史的一般化に満ちている。流動性選好理論を例にとることで、ケインズの私的な思索の豊かさと情熱は見えてこない。この流動性選好説の背後には、部分性を保蔵し、心理相などから、ラブ・オブ・マネーが経済の波であるというケインズの見方なのである。

次に小野善康氏の『貨幣経済の動学理説－ケインズの復権』（小野, 1992）および『不況の経済学－戦後の貨幣経済学』（小野, 1992）は、ケインズにおけるラブ・オブ・マネーから流動性選好概念への明示的説明はなないので、両概念を同義的に把握している。小野氏（小野, 1992）は、第1章を「序説－貨幣愛と不況」（同書1頁）と題し、「直接効用を生み出すものとしての貨幣」（同書3頁）に着眼して、ラブ・オブ・マネーが永続的な不況を生み出すことを強調している。そして小野氏は「一般理論」第17章の「貨幣の効用の非対称性を基礎とした貨幣経済における不況の発生」の「記述」（小野, 1992, ii頁）と一致するという動学的最適化理論の論証によるケインズの復権を主張している。

また原正彦氏は『ケインズ経済学の再構築－リアルとマネーの統合－』（原, 1994）の中で流動性選好説とラブ・オブ・マネーとの関係について次のように主張している。

「ケインズの流動性選好理論は、その後新古典派の人びとによって貨幣需要関数の安定性をめぐる問題として、ごく一意的かつ表面的に理解されてきた。われわれはここに改めて、流動性選好の源流が経済機関の推進力としての貨幣愛本能に求められ、資本主義経済の根源にかかわるものであるodbを強調しておきたい。」（同書, 175頁）

さらに郭煇正彦氏の『実務家ケインズ－ケインズ経済学形成の背景』（郭煇, 1995）は、第4章第1節を「貨幣愛の経済学」と題し、ケインズの「壮大な貨幣経済学」におけるラブ・オブ・マネーから流動性選好概念への展開を推定している。郭煇氏は、流動性選好説形成の背景に「若い頃からの賭博家」「果敢な投機家」（同書, 200頁）というケインズ自身の性格と実務家体験があったことを強調している。そして「貨幣愛という得体の知れない魔術不思議なモラルの問題こそ、ケインズ経済学の原点であった」（同書, 201頁）のだと主張している。

先にあげたスキデルスキー（Skidelsky, op. cit., p. 234）が指摘しているように、ケインズのラブ・オブ・マネーの概念は、フロイトの影響を受けている。そして後述するようにこの比較論に取り組んだのがウィンスロウ（Winslow, 1986）である。ウィンスロウは、ラブ・オブ・マネー概念を含めてケインズ経済学とフロイトの精神分析との密接な類似性を提示しようとしている。

しかしケインズが親しんでいた西洋の知的伝統の中にもラブ・オブ・マネーとそれに類似する語句が見られる。本稿では、まずケインズに至るまでのそうした思想史の中に見られる同一語・類似語の用例を探索してみた。しかし後にケインズほどラブ・オブ・マネー概念を多用して自身の言説を提示してい
た者はいなかったことを示したい。そしてその語において内容的にもひとつの頂点に立っていた思想として描いて見ることにしたい。

そしてその際に、われわれの基本的視点は前回（坂本,1994）と同様である5）。まず新古典派的な取引動機のみの貨幣需要や利子率の高低により資産選択の対象となる貨幣概念に限定されない。それらを踏まえている、小野善康氏（小野,1992,33-34頁）も強調しているように貨幣の効用関数を\( u = u(m) \)とすると、貨幣の限界効用が不飽和 \( \lim u'(m) > 0 \) の世界なのである。すなわちラブ・オブ・マネー概念をもって、人間のその御しがたき際限のない欲望とそしてそれが招く悪徳・弊害・不幸等がメイン・テーマとして説かれてきた。しかしこれはこれをもって清貧の思想を志向するものではまったくな。同時に貨幣そのものは悪ではなく、時にはラブ・オブ・マネーですら悪ではなく、貨幣と貨幣経済が認識されており、その肯定的側面も解説されていたことも強調しておきたい。したがってここにまたディレンマも潜んでいる。

このような基本的な視点から、前回はケインズだけであったのを今回は、ケインズとずっと古代の教説にまで遡ってアリストテレス、聖書から始め、ヒューム、マーシャル、フロイドの順に簡潔に描き、最後にケインズを取り上げてラブ・オブ・マネーをライト・モティーフとした貨幣への洞察の歴史を、いわば貨幣思想小史として試みることにした。

2. アリストテレスの蓄財術批判
—「政治学」第1巻

アリストテレスは「政治学」第1巻の第8章、第9章、および第10章で貨幣への際限のない蓄財欲を強調に批判している。アリストテレスは「富のいかなる限界も人間に対して設定されていない」とのソロンの詩の一節を引用している（Aristotle,1984,1256a33）。また「財を取得しようとする者たちは、みな自分の貨幣を無限に増やそうとする」（Ibid.,1257b34-35）と述べている。そしてアリストテレスによれば、そうであってはならないのである。

たしかにすべての獲得術が否定されるべきものではない。自然に適した「家政術 oikonomica の一部」としての獲得術もある。そのような「家政術とは生活に必要で家族や国家という共同体に役立つような貯えうることができる財を手元に見つけるか自給するかなければならない」ものである。こうしたものが真の富の要素である。「善き生活に必要とされる財の総量は無限なものではないからである」（Ibid.,1256b26-33）。つまり善き生活を実現できるのに必要な財を得たならば人間は満足すべきなのである。ところが人々はなぜそこに止まられないであろうか。

アリストテレスの「政治学」第1巻第9章では上のような自然に適った家政術・獲得術から逸脱した自然に反する蓄財術 crematiske・商人術 caperike の批判が次のように展開されていた。

「貨幣が案出されると、必要不可欠な交換とは異なる蓄財術が生じてきた。すなわち
商人的なものがそれである。初めはおそらく簡単なものだったろうが、しかし後に人々が経験によって、どこことからの交換をすれば最大の利益をあげられるのか、ということを知るにいたるや、よりいっそう技術的なものになった。このような貨幣の使用が始まるとき、蓄財術は主として貨幣に関係するものであり、富や財を作るものであり、その術の働きはどこからたくさんの財産cremataが得られるかを考えることだと思われるようになった。そして実際、富はしばしば貨幣の総量だけ見されていない。それは蓄財術や商人術が貨幣に関係しているためなのである。他の人々は貨幣はまったく無意味なものであって、自然には何のものでもなく、慣習的なものにすぎないと主張している。なぜなら使用者がその貨幣を廃止して他のものを採用したり、駆逐が同様、いかなる生活必需品に対しても少しも役に立たないからである。また実際に貨幣を多く持っているから必要な食糧にしばしば事欠くことになるからである。けれども、自分の前に置かれたものをすべて黄金に変えてほしいとの欲張った祈りが叶えられたために、貨幣を豊富に持っているから死んでもしまったという家のミダス王の物語にあるように、飢え死するようになるものが富であるとは奇妙なことではなかろうか。

それでも、ある人々は富や蓄財術の別の定義を求めているが、これは正当である。なぜなら自然にかなった富、自然にかなった蓄財術は別なものだからである。そしてこれは家政術に属するものである。一方、商人術は財を作るもの、それも、なんの努力も払わず、ただ財の交換によってのみ作るものである。そしてこれは貨幣に関係するものだと思われている。貨幣は交換の出発点であり、目的でもあるからである。そしてさらにこの種の蓄財術が生ずる富には境界がないのである。（Ibid., 1257b1-25）

このようなこの文章は家政術と商人術、自然と人為を比拝しつつ、貨幣の特質、富の特質を描いている。ここにアリストテレスのノミスムとしての貨幣観が明らかにされているのである。

そして、ここからアリストテレスの貨幣における自己目的化論が展開されて行く。目的と手段を混同した際限のない蓄財術の状況についてアリストテレスは次のように述べている。

「このような蓄財術にはその目的に限度がなく、それは偽りの種類の富であり、財の獲得なのである。しかし他方の家政術に属する蓄財術には限度がある。際限のない財の獲得は家政術の仕事ではないからである。それゆえ、この点からすれば、あらゆる富には限度がなければならない。それにも数かくわずに実際にはまったく反対の事実が現出される。なぜなら財を得ようとする者たちは、みな自分の貨幣を無限に増やそうとするからである」と（Ibid., 1257b25-35）。

それでもこのような貨幣への蓄積欲を人々が抱くのはなぜなのであろうか。アリストテレスはその原因を次のように解き明かしている。

「混乱の原因は二つの蓄財術が類似している点にある、いずれもきっかけとなるものが同じであり、用い方は異なるけれども、
たがいに通用するのである。同じ財産の使用だからである。しかし使用の目的は異なる。一方は蓄積がその目的であり、他方はそれとは別なのである。ここからある人々は、この蓄財を家政の対象と思うようになり、人々の生活全体の観念が無形に貨幣を増やし、これを失わないようにしなければならないのだということになる。人々がこの傾向を抱くようになる原因は、生きるところだけを考えて、より善く生きることを考えないからである。この欲望は際限なく、かれらはこの欲望を満足させる手段もまた際限がないはずだと願うのである。…かれらはこれを目的であるかのように考え、あらゆるものがこの目的に仕えなければならないと思うのである」(Ibid., 1257b35-1258a10).

以上のように述べながら、アリストテレスは人間を際限なく貨幣蓄財欲へと曳き立てる心理構造を解き明かしたのである。

最後にアリストテレスの鶚に有名な文章をあげることにしよう。

「蓄財術には二種類ある。そのうちの一つは家政術であり、他の一つは商人術の一部である。前者は必要不可欠のものであるが、後者は非難されてしかるべき交換に関するものである。それは反自然的であって、人々が相互から財を得るものだからである。憎まれてももっとも当然のものは高利貸しである。それ故の財が貨幣そのものから得られるのであって、貨幣がそのことのために作られた当のものから得られるものではないからである。貨幣は交換のために作られたものであるから、利子は貨幣をいっそう多くするものである。ここから利子 topos という名も生まれた。その名は生まれたものとそれを生んだものが似ているところからきている。利子は貨幣の子である貨幣として生まれる。したがってこれは蓄財術としてもっとも自然に反したものである」(Ibid., 1258a39-1258b7).

そして貨幣の本来の働きである交換の必要性を逸脱した貨幣の反自然的・反共同体的側面が、このような商人批判・利子否定論として説かったのである。

3. 金銭欲は諸悪の根源—『聖書』の教義


「金持ちになろうとする者は、誘惑、民、無分別で有害さざまざの欲望に陥る。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れる。金銭愛（philarguria）は諸悪の根源である。金銭を追い求めるうちに信仰から逃げて、さまざまのひどい苦しみで突き刺された者もいる」（同書. テモテ1.6: 9-10）。

しかし『聖書』の教義はこのように金銭への
欲望・執着を単に否定しているだけではな
い。金銭や経済生活に思い悩むことなかれ、
否、積極的に布施をせよと次のように野の百
合を説くのである。

「野原の花がどのように育つかを考えてみ
なさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、
言っておく。栄華を極めたソロモンできさえ、
この花の一つほどにも着飾ってはいなかっ
た。今日は野にあって、明日は油に投げ込
まれる君でさえ、神はこのように捉えてく
ださる。まして、あなたがたにはなおさら
のことである。信仰の薄い者たちよ…自分の
持ち物を売り払って施しなさい。掠り切
れることのない財布を作り、尽くることの
ない富を天に積みささい。…あなたがたの
富のあるところに、あなたがたの心もある
のだ」（同書、ルカ12：27-28,33-34）。

以上のように『聖書』は明確に「貨幣のダー
ク・サイド」を示している。しかしリチャ
ード・J・フォスター（Foster, 1985）によれば、
『聖書』にはマタイ福音書のタラントンの比
喩（共同訳聖書実行委員会,1987,マタイ25：
14-29）やルカ福音書の不正な管理人（同書、
ルカ16：1-13）など「貨幣のライト・サイド」
の教義もあるという。ルカ福音書には次のよ
うに説かれている。

「主人は、この不正な管理人の抜け目な
いやり方をほめた。この世の子らは、自分
の仲間にに対して、光の子らよりも賢くふる
まっている。そこで、わたしは言っておく
が、不正にまみれた富で友だちを作りなさ
い。そうしておくれば、金がなくなったとき、
あなたがたは永遠の住まいに迎え入れても
もらえる。…不正にまみれた富に忠実でなけ
れば、だれがあなたがたに本当に価値ある
ものを任せるだろうか。…どんな召し使い
も二人の主人に仕えることはできない。…
あなたがたは、神と富とに仕えることはで
きない」（同書,ルカ16：8-13）。

主人は不正な管理人の抜け目ないやり方を
はめている。そうしたやり方であくまでも
信仰の友＝救いの道を得ておくことが重要
のであろう。根本的に富は不正・不義にまみ
れがちである。富と神の二神に仕えることは
できない。このように相当に限定的なのが、
アリストテレスの場合にもそうであるよう
に、フォスターの指摘する「聖書」の「貨幣の
ライト・サイド」もいちおう考慮すべき視
点であろう。

4. ヒュームの貨幣情念論

18世紀のヒュームの政治経済論集の一論文
『アーツにおける洗練について』の中にラ
ブ・オブ・マネーの語がみられる。ヒューム
はラブ・オブ・マネーの抑制について次の一
に述べている。

「富がすべての時代にすべての人にとって
価値があるのは、人々がなじんでおり、ま
た欲しいと思うような倉庫品を、それがあ
かくも購買するからである。名目と徳性の意
識を除けば、ラブ・オブ・マネーを抑制し
たり規制したりできるものはほかに何もない
。そしてこの名目と徳性の意識は、すべ
ての時代を通じてはほとんどというものはで
ないとすれば、知識と洗練との時代におの
すから最も多くみられるであろう」
（Hume, [1777] 1985, p.276.訳26-7頁）。
このように述べて、さらにヒュームは金銭腐
敗が最もひどい国は当時の後進国ポーランド
五月の講義
坂本幹雄
ラブ・オブ・マネー

王国である点を指摘し、金権崩壊政治は文明化社会・商業社会の奢侈の洗練が原因であるとの説を論難している。結局ヒュームによれば、ラブ・オブ・マネーを抑制できるのは「知識と洗練の時代」としての文明化社会・商業社会に著しく少ない「名誉と德性の意識」以外はない。

このラブ・オブ・マネー批判の一方、ヒュームは「利子について」の中では次のように述べている。

「人間にずっと愛の少ない精神は肉体の用い方を教えれば、彼は満足して、快楽へのあの飽くことなき渇きはもはや感じなくなれる。しかしもし彼に与える仕事が働けあるものならば、これに勤労の行いにはどんな種類のものにも利益が付与されるならば、彼は頻繁に利得を眼中におくわけであり、こうして彼は次第に利得に対する念を獲得し、自分の財産が日々増えてゆくことを見る喜びにまきられた喜びを知らぬようになる。……利得術 the arts of gain は間もなく人々の愛着心を一ぎつけ、快楽と出費に対するあらゆる好みを取り除く。節約を生み出し、利得愛 the love of gain が喜楽愛 the love of pleasure に打ち勝つのは、あらゆる勤勉な職業の必然的結果である」（ibid., p.301.訳26～7頁）。

このようにヒュームはインダストリーを刺激する欲望を利得愛として、この強力な利得愛にもとづく活動を文明発展の原動力として肯定的に評価している。

さらにヒュームには『人間本性論』の情念論の中に貨幣に関する分析がある。その中でヒュームは次のように述べている。

「吝嗇家は、自分の貨幣から喜びを受け取る。すなわち貨幣が彼に与える生活のあらゆる享楽や値段を獲得する支配力 power から喜びを受け取る」(Hume [1739, 1740] 1978, p.314.訳316頁)。

生活上の享楽や値段を獲得する支配力の中にまさに「富の本質」 essence of riches がある。ところが「この支配力の本質」は、真偽いずれの論拠によるにせよ、本を予想させるところにある。結局「この喜びの予想 anticipation of pleasure からのもの、まさにおいじよような喜びなのである」（ibid., p.315.訳367頁）。

このような「人間本性論」の貨幣の象徴化作用という視点は、上述の『政治論集』引用文中のラブ・オブ・マネーやラブ・オブ・ゲインの分析に共通した貨幣の把握となっている。これがヒューム貨幣論のもうひとつの大きな特徴ではないかだろうか。

そして以上のようないくつか貨幣論にアリストテレスの自己目的論との共通性を見てとることもできるかもしれない。そしてさらに興味深いのは、ヒューム貨幣論における心理側面の重視は、ゲインズとも共通するとところではなかろうか。

ところで上述の「労働の果実としての喜びだけでなくは、仕事そのものをも報酬として受ける」(Hume, op. cit., p.270.訳21頁）という欲望と活動というヒュームの基本的構図は次にあげるマーシャルの中にもみられる。

５．マーシャルの＜貨幣と成功＞

マーシャルによれば、人類の初期段階から文明が進歩した段階は、卓越そのものを求める欲望の段階であって、新たな欲望が、新たな活動を喚起するよりは、新たな活動の発展
が、新たな欲求を喚起する方向に作用する」段階となる（Marshall, 1920, p.75.）。このような経済進歩の段階では、企業者は利己的な経済人 the economic man ではない。マーシャルは経済人について次のように述べつつラップ・オブ・マネーに言及している。

「経済人は単純に利己的でないことは一見しただけでわかる。それぞれとか、一般に経済人は、主として他者の利益のために資本を貯蓄しようとして懸命に働く。…クリフ・レズリーに同調して、一般に「ラップ・オブ・マネー」のチームの下に一括されている動機の膨大な種類のすべてを分析するならば、それはあらゆる種類に及ぶことを知ることができる。それは、われわれの性質のなかで、最高の、最も洗練された、最も非利己的な要素を含んでいる。それらを結ぶ共通の環は、程度の差はあれ、測ることができるということである。そしてわれわれの世界においては、それらは貨幣によって測られる」（Marshall, [1885] 1925, pp.160-1.）。

このようにマーシャルにあってはラップ・オブ・マネーは他者の福祉への貢献さえも含むものとなっている。

マーシャルの企業家への期待に即していれば、かれらは産業の指導者、経済的理盤の実践者として期待しうる存在である。マーシャルによれば「ビジネスの理盤は公共精神を含む」（Marshall, [1885] 1925, p.330）ものである。そしてマーシャルはヒュームと類似した構想のもとで次のように述べている。

「トーナメントの賞金をそれが証明する成果のために主として評価し、それが市場で貨幣によって評価される価値に対しては、副次的にしか評価しない戦士のすくれた自負心を賜っている」（Ibid.）。

このように「もっとも有能で最良の企業家はそれがもたらす貨幣よりは成功そのものを見たるもののがある」（Ibid., p.331.）のであり、結局、悪い行為がなければ「成功はリーダーシップのよい平凡な証拠である」（Ibid., p.332.）。このようなマーシャルの成功と貨幣の構図は、マッキンタイア（MacIntyre, 1984, ch.14.）の内在的と外在的の区別と比較することができるかもしれない。

ところで以上のようないまーシャルの楽観的な経済生活道に対して、ケインズは不確定性下の貨幣経済における企業者の分解・スピリッツに期待したのである。

6. フロイトの貨幣の精神分析

フロイトの精神分析には貨幣論がある10)。それは「性格と貯蓄愛」（1908年）、「欲動転換—特に貯蓄愛の欲動転換について」（1917年）（フロイト,1969）等の論文に見られる。前者は貨幣への精神分析的アプローチの古典と称すべき論文である。フロイトの精神分析は幼児の発達段階において口唇期につく時期として貯蓄期・貯蓄サディズム期と呼ばれる時期を想定する。「性格と貯蓄愛」はその貯蓄愛の発達段階のリビドーの性格形成への作用を論じたものである。

その中でフロイトはラップ・オブ・マネーを貯蓄愛の変換と見るのである。フロイトは「貯蓄性格」を「ひとりきりの小さくて客観で頑固」と特徴づけ、そしてこのような性格特徴は「貯蓄愛の昂華のもっとも手近でもっとも恒常的な成果」（同上, 135頁）であると述べている。
そして「貨幣に対する関心と排便との二つのコンプレクス」の間の関係に注意を喚起して次のように述べている。

「実際、太古の文化が支配であったところ、あるいは残っているところではどこでも、古代文化においても、神話、童話、迷信においても、無意識的な思考においても、夢においても、また神経症においても、貨幣は排便ともっとも深い関係をもたらされている」と前引(137)。

このように述べ続けて黄金と排便との関係について次のように述べている11)。

「悪魔がその密猟に贈る黄金が、彼の立ち去った後には、排便に変わってしまうという話はよく知られているが、この悪魔はしかし、抑制された無意識の本能生活が擬人化されたものにほかならないのである。さらに知られているのは、宝の発見を排便と一緒にする迷信であり、また「金貨をひきだすひと」Dukatenscheisserの像はだれにも親しまれているものである。そればかりか、すでに古代パピリニアの教義においては、黄金は地獄の糞なのでありMammonをIlu manmanである。したがって神経症が言語慣習にしたがうとくには、この場合でも他の場合でも、病者の本源的な含蓄の深い意味によるのであって、また神経症が一つの言葉を象徴的表現し、視われる場合にも、一般にその言葉の古い意味だけが再現されているのである」(同上)。

ここに容易に排便＝黄金、貨幣の性＝貨幣の聖性を読み取ることができるのである。フロイトの貨幣論は「聖なるものと破壊するものにある同一性」(栗本、1979，183頁)を示唆するものであった。後述するものであった。

後述するようにこのようなフロイトの貨幣の精神分析がケインスに影響を与えたのである。

7. auri sacra fames—『貨幣論』第35章

『貨幣論』の第35章には<auri sacra fames>と題する一節がある。そのポイントを、本稿では昨述したフロイトのラブ・オブ・マネー論、<呪われた>黄金欲という語句、そして近代鍛金術の三点にまとめて見ていくことにしよう。

まずフロイトに関して見れば、ケインスは次のように述べている。

「フロイト博士は、われわれの潜在意識の深い所には、とくに金goldが強い本能を満足させ、象徴として役立つような、特別な理由が存在すると述べている」(Keynes[1930]1971,p.258.)。

このように述べて脚注では『ラブ・オブ・マネー、とくにラブ・オブ・ゴールドに関するフロイト理論』(Ibid.,pp.258-259.)に注意を喚起している。ケインスとフロイトとの比較に関してもウィンスロウの注目すべき論文(Winslow,1986)があり、章を改めて検討することにしよう。

次に<呪われた>黄金欲についてわれわれが思いをめぐらせれば、ヴェルギウスから始まって聖書、シェイクスピアなどさまざまな言説を想起することができる。ケインス自身は次のように述べている。

「昔、エジプトの聖職者たちの政策がこの黄色い金属に浸み込ませた魔術的な性質
を、金は決して一度も失ったことはなかった」（Ibid.）。
一方、ケインズは何か所で金を「神々」
godsと表現し次のように述べている。
「金はもともと……太陽のごとく……天に配置
されていたが……その神聖な属性を脱いでの為
制君主として地上に降りてきた」（Ibid.,
p.261.）。
このように黄金欲には明らかに神聖視されて
いた金への渴望の意がある。

ビインスヴァンガー（ビインスヴァン
ガー、[1985]1992）はこの言葉の持っている
両義性についてその議論の結論として次のように述べている。
「経済は常に成長を求めて努力することに
よって聖なる性格を基に作り出された。われわ
われはヴェルギリウスの言葉「黄金の呪わし
き醜鬼」をゲーテのファウストのモットー
にすることもできるであろう。この言葉は、
その中の<sacer>という語に「聖なる」
かあるいは「呪わしい」との二重の意味が
あるために、それに応じて、ドイツ語では
全く違った訳がなされる。したがって、ヴェ
ルギリウスの言葉は、「金を求める聖なる
渴望」か「金を求める呪わしき渴望」かの
どちらかの意を表す。どちらが正しい訳で
あるかは、今日、歴史の彼氏に立たされ、
ファウストと同様に「憂い」一人類の未来
に対する不安、人間という存在の未来に対
する不安——直面して、われわれに求めら
れる自らの決定によって決まることであ
る」（ビインスヴァンガー、[1985]1992,96
頁）。
このようなビインスヴァンガーの議論や前述
のフロイトの貨幣の精神分析論から本稿では

AURI SACRA FAMES は「神聖なる」とい
う意味も頑る大きいと解する。一見すると、
ケインズの金本位制批判からは「呪われ
た」とが適訳のように思われるかもしれない
ないが、ケインズの歴史的記述は「神聖なる」
の方が適訳と解することもできる。そして本
稿が示すケインズの貨幣観も塗抹すれば、両
義的に解した方がよいのではないか。し
たがって原語のまま表記する方針を取りた
い。

＜呪われた＞には、たしかに古来からの金
に対する人間の欲深さとその結びつきという事
情が含まれているであろう。またさらに一方
で西洋の歴史上、鍊金術に対する一般の人々
の非難は、＜呪われた＞とするダークサイ
ド・マネーの見方を強めるものでもある。
そこで次に鍊金術について見れば、ケイン
ズ自身は金の歴史を描く中で鍊金術の話を用
いて次のように述べている。

「中央銀行間の協定によって、形式的には
金による支配を少しも放棄することなしに
実際にその地下室に埋められている金属の
数量が、近代鍊金術 a modern alchemy に
より、それらの中央銀行の望むものを表わ
し、またその価値が、それらの望む価値を
表わすようになってくるであろう」
(Keynes [1930] 1971, p. 261.)。
物質ならぬ価値への鍊金術が近代鍊金術であ
る。ここで近代鍊金術は単なるレトリック以
上のものがあると見ることができるだろう。

8. 貨幣への深層心理学的洞察—ケイン
ズとフロイト

ケインズへのフロイトの影響はケインズ自
9．貨幣の意識革命——「ロシア管見」

それでは次にいよいよラブ・オブ・マネーの説語が頻出する『説得論集』の諸論文を通観することにしよう。ケインズは「ロシア管見」の中で、レーニン主義の「感覚的・倫理的本質はラブ・オブ・マネーに対する個人と社会の態度の一点に集中すること」と述べて、レーニン主義の本質はラブ・オブ・マネーに対する新たな態度にあると把握している。将来の成功したロシアでは「経済的や貯蔵のようない、現在のわれわれの社会におけるラブ・オブ・マネーのもっとも称賛すべき側面でさえ、また自分自身と家族の家計上の安定性と独立性の達成さえ」軽視され実行不可能なるだろうと推測している。

このようにロシア・コミュニズム批判を展開しつつ、われわれ自身はどう受け止めていけばよいのかとケインズは語りかけている。『私にとって日々ますます明らかに』なってくる「われわれの時代のモラルの問題」としての貨幣の問題＝「本質的な問題」について。ケインズは「ラブ・オブ・マネー…人生の諸活動の十中九八まで貨幣的な動機に習慣的に訴えていること、…主要な努力目標として個人の経済的保障の普遍的な追求、…建設的な成果の尺度としての貨幣の社会的意義、家族および将来のために必要な準備の基礎としての貨幣保存本能に社会的に訴えること」の五つをあげている。ケインズはこのような指摘しつつ「貨幣に関するわれわれの考え方と感じ方の革命が、理想的な現代的な具体化という目的の強まりとなってあらわれるかもしれない」と貨幣の意識革命を予想したのであ
10. 資本主義の本質としてのラブ・オブ・マネーの本質—「自由放任の終焉」


「個人主義者は、交換価値で評価してもっとも強く欲求されるものについて、可能なかぎり最大規模の生産を実現するために、自然淘汰の補助として利潤の追求を通じて作用するラブ・オブ・マネーに訴えてい る」（Ibid.）。

生物学のダーウィニズムにおける競争における自然淘汰の補助としての性の淘汰の過程で作用する「性愛」は、経済の自由放任主義の「ラブ・オブ・マネー」とパラレルである。

しかしこのラブ・オブ・マネーの自由放任主義は非現実的である。私的利益と公共の利益の予定調和が成立する根拠はない、そこで政府のなすべきことがある、なすべきからざることもある。たとえば「資本主義の本質的特徴」は「経済機構を動かすメイン動力として個人のマネー・メーキングとマネー・ラビングの本能（the money-making and money-loving instincts of individuals）に強く訴えること」である。この点は残して活かされなければならない。「集団行動を媒介とする現代資本主義の運営技術」に関してケインズの提唱する「改善」は、この点と矛盾するものではない。資本主義の本質的特徴をなすラブ・オブ・マネーの本能と経済というマシーンは暴走するおそれがある。ケインズは「賢明に管理して」制御すべきだと結論づけた。そしてこの結論は後述するように「一般理論」の社会哲学において繰り返されている。

11. 「われわれの神」—「わが孫たちの経済的可能性」

ここでは聖書の教義と比較しながらラブ・オブ・マネーが語られている。ケインズによれば、将来「貨幣動機をその真の価値において評価」できる時代が到来したならば、「人生の喜びと現実のための手段としてのラブ・オブ・マネー」と「ありのままの存在として、多少いまいましい病的なものとして、また身体いしつ精神病の専門家に委ねられるような半ば犯罪的半ば病理的な性癖のひとつとして認識される」ような「財産としてのラブ・オブ・マネー」とを区別できるようになる（Keynes [1931]1972, p.329.）。

しかし現在のところ総じてラブ・オブ・マネーに対して聖書にあるように冷淡になるわけではない。「貪欲は悪徳であり、高利の強要は不品行であり、ラブ・オブ・マネーは嫌悪すべきものである」という「宗教と伝
統的な徳に関するもっとも確実な原則」に立ち戻ってみると「われわれは、もう一度、手段よりも目的を高く評価し、効用よりも善を選択することになる。われわれは、次のような人々を尊敬するようになる。それはいかにしてこの時間、この一日を高潔に上手に組み取るべきかをわれわれに教示してくれる人たち、のごことの中に直接の喜びを見出すことができる陽気な明るい人たち、汗して働くことともせず、絞ぎもしない野の百合たちである」（Ibid., p.330-1）。マタイないしルカの福音書に記されているこのような清らかな思想が将来実現するかもしれない。しかし「貪欲と高利と警戒心を、まだもう少しの間は、われわれの神とせねばならない。なぜならば、この三つだけが経済的必要というトンネルからわれわれを陽光へと導いてくれることができながらである」（Ibid., p.331）。

スキデルスキーは、この論文をとりあげながらケインズのラブ・オブ・マネーを論じて、それは「1920年代には…徳道的・心理的に黒いが、経済的には善であった」しかし「1930年代までは経済的にも黒くなっていた」（Skidelsky, 1992, p.238。）と評価している。ともかくそれは最後に「一般理論」を見なければならない。

12. ラブ・オブ・マネー論の系譜としての「一般理論」

「一般理論」では、有効需要の原理と並んでケインズ理論の主柱のひととといわれるようになった流動性選好理論が示された。貨幣理論の抽象水準が高度化して流動性選好概念が説かれたのである。これまで見

てきたように「説得論集」では頻出していたラブ・オブ・マネーの語句が「一般理論」では消えてしまったのである。しかしここに至ってもなお、われわれは「一般理論」をもラブ・オブ・マネーの系譜の下に読み続けてみることはできるのではなかろうか。いかえれば、われわれはケインズのモラル・サイエンスとしての経済学における貨幣思想の倫理的関連というわれわれの路線を放棄せず堅持していくことができるのであろうか。

まず第12章と第24章を中心とした読み方をあげなければならない。第12章をケインズ自身は「余談」または「物語」といい「本書の大部分とは異なった抽象水準にある」と評している。これはある意味で「長期期待の状態」「確信の状態」という人間の心理がテーマとして前面に出てくるからではなかろうか。これを分析し、議論するためには「市場とビジネス心理に関する実験観察」に依拠しなければならない。とケインズは見ている。第24章はケインズの社会哲学である。なるほど両章は「一般理論」固有の抽象水準の流れの中で異質である。理論を基礎づけまたは包括するような倫理的・哲学的・心理的・現実的な内容が多々っている。このような「一般理論」におけるケインズ貨幣思想の部分は、いまや「説得論集」から再構成してきて川われわれの流れの中に配することができるのではなかろうか。

13. 流動性崇拝と賭博本能——「一般理論」第12章

「一般理論」ではラブ・オブ・マネーの語
は消えた。しかし類似の概念は生きているように思われるのである。

ケインズは第12章の中で次のような強烈なパルプ経済批判を展開している。
「たしかに正統的金融の格調の中で、流動性崇拝 the fetish of liquidity すなわち「流動的な」有価証券の所有に資産を集めることが投資機関の積極的な他性であるとみなす教義ほど反社会的なものはない。それは社会全体にとっては投資の流動性というようなものには存在しないということを忘れている。熟練した投資の社会目的は、われわれの将来を覆い隠している時間と無知の暗い圧力を打ち破ることでなければならな
い」（Keynes[1936]1973,p.155.）。

ここにも基本的には「自由放任の終焉」以来のラブ・オブ・マネーのテーマが流れていることを読み取ることができるであろう。

「「流動性」に主眼をおいて組織化された投資市場」「現代の投資市場」はゲームの世界である。「市場の群集心理」の動向を予測して行動するプロのゲームプレーヤーが決する世界である。「真の長期期待を基礎とする投資は今日ではきわめて困難であってほとんど実行不可能となっている」とケインズは述べている。

「社会的に有益な投資政策がもっと大きい利潤を生む投資政策と一致するという明白な証拠は、経験からは得られず。仲間に出しさくまなく、時間の圧力と将来についてのわれわれの無知の圧力を打破する方がいっそう多くの知力を必要とする。その上、人生はあまり長いものではない。 ——人間本性は早急な結果をのぞんでいる。手っ取り早い金儲けには特別の楽しみがあり、遠い将来の利得は、つうのひとはこれをきわめて高い率で割引るものである。プロの投資家は賭博本能 gambling instinct をまったく欠いているひとりにとっては耐えがたいほどに退屈なものであり、辛いものであるが、他方、そのような本能をもっているのものは、この性向に対して相応の料金を支払わなければならない」（Ibid., p.157.）。

このように現代の投資市場を観察してケインズは投資の経済倫理を説いているのであるが、ギャンブルの本能に駆り立てられあるはじ配される人間の世界として、人間本性論的に説いているのが、特徴的ではないだろうか。

14. マネー・メーベリング・パッション
——『一般理論』第24章

複利の時代は終わった。「投資の社会化」によってやがて低利子率水準の実現による「金利生活者の安楽往生」にまで至る。ケインズは消費・投資に対して貯蓄・投機を非難したが、そうかといってわれわれは最終的にケインズが思想的にも実践的にも浪費・濫費を推奨したとする立場を取るものではない。めざすべきは「価値ある人間活動」の「充分な実現」であった。この点をケインズの社会哲学は次のように説のくのである。

「価値ある人間活動を十分に実現するためには、マネー・メーベリングの動機と私有財産制度の環境が必要である。その上、マネー・メーベリングと私有財産制度の機会が存在するために、危険な人間の性癖を比較的無害な経路に運ぶことができるのであって、それらの性癖は、もしこの方法によっ
て満たされないと、残忍性や、個人の権力や権威の無謀な追求。その他の自己顕示的形態に調整を求めるようになる。人が暴君となるなら、同胞市民に対する暴君となるよりは、自分の銀行残高に対し暴君となる方が多い。後者は前者へ
の手段にはならないとして非難される場合もあるが、少なくとも時には後者は前者の代わりになる」(Ibid., p.374.)。

マネー・メーディングの動機と私有財産制度は、価値ある人間活動の実現のために必要であり、同時に危険な人間の性質を緩和するためにも必要なのである。しかし、やはり非難
はあてはまる。行き過ぎているのである。前者への「手段」になる可能性がある。現実は
あまりにもラブ・オブ・マネーの横行する世界である。ケインズはこれを統御せよと次のように説いている。

「しかし、これらの活動を刺激して、それらの性質を満足させるためにも、ゲームが
今日のような高い賭け金を目当てに演じられる必要はない。もっと低い賭け金でも、
プレーヤーがそれに慣れてしまえば、同じように目的に達であろう。人間本性を変
革する仕事とそれを統御する仕事とを混同してはならない。理想的国家においては、人々が賭けに興味をもたないように教育され、鼓吹され、誘われることもあるかもしれませんが、平均的人間あるいは社会の重要な階層さえも、事実上、マネー・メーディング・バッションに強く耽っているかぎり、ゲームをルールと制限の下で行うことを許すのがやはり賢明で思慮深い政治術というものであろう」(Ibid.)。

ケインズ、「人間本性変革の課題」the task of transmuting human nature については
理想的国家＝コモノウェルスにおいてしかできないと悲観的である。これに対してマ
ネー・ゲームの破壊的効果を緩和しようとす

る「人間本性統御の課題」the task of
managing it を果たすことがわれわれに要請
しょうことなのである。

ところでそれではたしてマネージは誰が
すべきなのか。やはり後者が前者なしにはたせてどれほど可能性なのかの問題が残るの
ではなかろうか。これこそは『一般理論』の
暗示している社会哲学の普遍的課題ではなか
ろうか。

15. まとめ—ケインズに収束して

本稿ではケインズ以前に関して、ラブ・オ
ブ・マネーおよびその類似概念に限定してア
リストテレス、『聖書』、ヒューム、マーシャ
ル、そしてフロイトの順に各々の貨幣思想の
再構成を試みた。ケインズ以前の諸説を取り
上げた意義をケインズへと集約・収束しつつ
簡潔にまとめえておこう。

まず古代の貨幣論としてアリストテレスの
所説を取り上げた。アリストテレスの貨幣思
想には共同体における貨幣の重大視、警戒視
という点で、本山美彦氏（本山,1933）も指
摘するように、ケインズと通底するところがあ
ろう。

ケインズのキリスト教・伝統的宗教の貨幣
倫理批判を見るのは容易であろう。しかし同
時にケインズがその直接間接の批判の文脈に
おいて、説得のトリックとして宗教的アナ
ロジー・メタファーを駆使していた点を見る
ためには、当の『聖書』の教説を確認するこ
とも必要な作業ではなかろうか、ケインズの『聖書』に対する理解と距離がより明らかとなろう。

ケインズをヒュームの人間本性論の系譜にあると見れば、貨幣思想における人間の心理重視の観点から、当のヒュームがいかなる貨幣思想を展開していたのかという問いが成立するであろう。そしてヒューム貨幣論を顧みると、そこにもヒュームの人間本性論的特徴を一貫して見ることができるのではないか。貨幣と心理という観点からヒュームとケインズには共通の視点があったことを確認できよう。

師のマーシャルについては本稿の課題に限定して貨幣思想の一部にについて検討することができた。そしてマーシャルの肯定的なラブ・オブ・マネー概念は、ケインズの中に見られた。

このように見てくるとヒューム、マーシャル、そしてケインズという貨幣のヒューマン・サイエンス、モラル・サイエンスの系譜が浮かび上がってくるのかもしれない27)。

ケインズ体系における心理学のウエイトは、じときに大きく、一部ならぬものが見るように感じられる。ケインズへのフロイドの影響もこの点を物語るものである。

以上、本稿では貨幣論の大家としてケインズほどラブ・オブ・マネー概念を重視して一貫しも統一的た意味で用いていたわけではないけれども一自身の言説を提示した者はいなかった点を書いて見たつもりである。しかもそれは内容的にも豊潤であってひとつ一つの頂点に立つ思想ではなかっただろうか。

そして前章で確認したように「一般理論」に見られる「流動性崇拝」「賭博本能」そして「マネー・マーキング・パッション」等をもって語られているケインズの貨幣思想も、ラブ・オブ・マネーの系譜にあるものとして読むことができた。

ラブ・オブ・マネー概念に象徴されるケインズの貨幣への深層心理学的洞察、人間本性論的貨幣論こそ、スタンダードな現代経済学や現代時計論著しく異なる特徴であり、貨幣の経済学の重要な側面－規範的側面－倫理的側面を構成するものではないか。ひとつは、これが「一般理論」をも含めたケインズのラブ・オブ・マネー概念に関する本稿の結論的見通しである。次の課題は「一般理論」以後を含めた再構成である。

16. エピローグー世紀末の貨幣思想
イコプ・ニードルマンの『貨幣と生の意味』（Needleman, 1991）である。

前者は日本のパブ経済を受けてベストセラーとなった著作である。われわれとはいわゆるパラダイムが違うとしよう18。いずれにしても評価や排他性の専門的見地では、貨幣を経済的実存と受け止めるを得ない20世紀末に生きる人間を説得することはできないのではなかろうか、そこにわれわれはケインズ貨幣思想の現代的意義を認めたいのである。われわれが本稿を通じてケインズの貨幣との間関がいまなお光彩を放つ所に示したことであり、

後者のニードルマンの書は、現在のところ、貨幣と人間との関係を啓蒙的かつ哲学的・宗教的に論じたという点で拠目すべき書ではなかろうか。ケインズと通ずるあるいはその先を歩む貨幣思想として読むことが可能な著作ではなかろうか19。すなわちニードルマンの書は、貨幣と真正面から対峙して、ケインズが取立組まなかった「人間本性変革の問題」に取立組んだ著作と見なすことができるのではなかろうか。

注

※引用させていただいた邦訳書の訳語・訳文は強調・文脈上などの理由から変更した場合があります。ご容赦いただきますようお願いいたします。

1）弱気論に関しては、「貨幣論1 貨幣の純粋理論」の次の箇所を参照されたい。Keynes [1930] 1971, pp.127-129, pp.222-230。流動性選好概念に関して、ケインズは1932年の草稿「生産の貨幣的理論」の中で次のように述べている。

「……産出量と価格が下落するにつれて、所得に対する貨幣ストックの比率が増大する傾向にある。この増大する貨幣の相対的過剰は、所得に比例して流動性に対する一般的欲

望が段階なく増加することができなければ、利子率の低下をもたらすことになる。そして利子率の低下は、当面はさまざまな「弱気」要因のために、投資に対する好影響を与えることはなかろうが、運が悪ければやがてそうなるであろう」(Keynes, 1973a, pp.395-396.)。ここには見られるように利子率決定論としての流動性選好説が登場している。さらに草稿「貨幣経済のパラメター」では取引動機の貨幣需要に対する流動性選好状態の定式化が見られる（Cf. Ibid., pp.396-405.）。

『貨幣論』から『一般理論』への転換の事情を示す文献としてよく引用されるケインズ自身の文章として1936年8月30日付ハロルド宛書簡がある。その中では流動性選好説について次のように述べられている。

「私にとって、歴史的に顧みてもっとも異常だったことは、全体としての差出量に関する需要・供給理論すなわち流動性理論が、経済学において既存半世紀の間、もっとも議論されてきた事柄であったにもかかわらず、その後、完全に消滅してしまったということです。『貨幣論』出版後、私にとってはもっとも重要な変化のはつは、このことに突然気がついたことです。それは所得が増加する時、所得と消費との間のギャップが増大するという心理法則を私自身が明らかにしてから数のことです。--この結論は私自身の思索にとってはたいへん重要性をもつものでしたが、他の人にとっては明らかにそうではありませんでした。それからかあまり後になって、流動性選好の意味するものとして利子の概念が浮かび、この考えは、それを見つめた瞬間に、頭の中でじつに明白なものとなりました。そして最後に、はてしないものの混乱と下書きを経た後に、資本の限界効率に関する適切な定義に達し相互に結びつくものとなったのです」(Keynes, 1973b, p.85.)。

2）ケインズ全集第14巻（Keynes, 1973b）所収の『雇用の一般理論』「利子率の代替的諸理論」「利子率の事前理論」ケインズの「ファイナンスI」等の論説を参照されたい。

3）注1参照。本稿では流動性概念そのものの源流については鍵金術との関連から注目し、戦争の影響を含めが別途、流動性そのものに着目した概念史を広く思想史にわたって
インスの貨幣論の類似性については、本山、1993「はしがき」「第7講」を参照されたい。
7）ここではインスとの関連、貨幣との関連を軸に参照しており、『聖書』の経済倫理全体を取り上げるわけではない。
8）ロートワインの解釈を参照、Rotwein, 1976, p.124。ヒュームに関しては以前に検討したことがある（坂本、1993）。
10）フロイトの貨幣論については、さああって栗本1979を参照されたい。特に第9章「貨幣のシンボリズム」フロイト貨幣論の難点に関しても、同書180～199頁を参照されたい。
11）エンデ、1993にはこのフロイトのモチーフが見られる。
12）呪われた＝sacraの訳語・意味について再検討の余地ありとの考えは「貨幣改革論」の金本位の「未開社会の遺物」barbarous relic (Keynes, [1923].1971,p.138.)の訳語も含めて、西川元彦氏の示唆による。
ビンスヴァンガーの『金と魔術－ファウスト』と近代経済（ビンスヴァンガー、1995）は、その点を如実に示した研究である（本文後述の引用文参照）。ビンスヴァンガーは、「ファウスト」を鍾金術現象としての近代経済論として提示している。そしてビンスヴァンガーは、ゲートが鍾金術師ジョン・ローゾモデルとしてはじめた点を強調している（同書51～52頁）。またビンスヴァンガーは流動性概念について次のように述べている。
「この紙幣の発行ということにより、地下資源の流動性（ラテン語のliquidus「流動体の」、「流動的な」）が、とてもなく飛躍的に、完全に非流動的なもの（埋蔵された金）から完全に流動的なもの（流通する紙幣）へと、高められるのである。ここに、流動化という意味において、水の原理解したがって水銀の原理が見られる。地下資源の流動化を可能にする力は想像力…」（同書26頁）。
このように鍾金術の水・水銀の原理は、（発掘前の）地下の金を担保にして紙幣の発行・流通という点から、経済学の流動性概念と結びつきのあるもの。

14）小沢正彦氏（小沢,1995,183－184頁,190－200頁）が指摘しているように、love of money → liquidity preference→ demand for money 並並行させるに至るまでの抽象化の水準は高く、無気質で人間性は薄れていく感じがある。流動性選好は、利子率現象の心理や慣行を重視するケインズのモラルサイエンスとしての貨幣的経済学の書「一般理論」の到達した独自の概念であろう。

15）ただし引用したボプソンの文章の中にある（Keynes, [1936] 1973, p.366）。

16）「ハーヴェイ・ロードの前提」（Harrod, 1951, p.583.）をケインズのエリート官僚主義として批判するのはたやすくろう。しかし次のような注目すべき解釈もある。

「ハーヴェイ・ロードの前提」は何も官僚の優秀さをいうためのみある言葉ではない。人々の思考方法、立脚振舞、趣味、教育などおおよそ人の世の万事に当てはまる「前提」であった（吉川,1995,12頁）。

(悪しき)エリート主義としての「ハーヴェイ・ロードの前提」ではなく、ここにいう「ハーヴェイ・ロードの前提」を獲得することは「人間本性変革の課題」なるものではないか。かつての

17）ケインズの一つ「英国のヒューマン・サイエンスの伝統」（Keynes, [1933] 1972, p.86.）からのアプローチ。

18）反転タイプであればいべき西洋版の消費の思想がミルワールド1993年である。筆者は仏教を消費の思想をキリスト概念として解釈する立場をとらない。しかし仏はそれを論じる場ではない。また筆者は消費の思想の現代的意義を重視しない。

19）ラブ・オブ・マネーに関しても議論がある。次の箇所を参照されたい。Needleman, 1991, pp.182-184. 402頁。
London: Macmillan / Cambridge University Press. 1977年。


[25] 栗本無一郎. 1979.『経済人類学』東洋経済新聞社。

[26] 共同訳聖書実行委員会. 1987.「聖書 新共同訳」日本聖書協会。


[33] 本山美彦. 1993. 『ノミスマ（貨幣）—社会制御の思想—』三協書房。

[34] 武藤光則. 1977. 『貨幣 この没無性なもの』現代思想 5巻1号。


[36] 郎須正彦. 1995. 『実用家のケインズ—ケインズ経済学形成の背景』中公新書。

[37] Needleman, Jacob. 1991. Money and The...
June 1997 坂本幹雄：ラブ・オブ・マネー

Meaning of Life. New York: Doubleday. 恭平美

幸訳『お金，この神聖なるもの』角川書店，
1992年。

[38] 西川元彦, 1996『人間と貨幣・難題』近代化
研究所編『第二期ヒューマノミクス研究会』
No.5

[39] 小野喜康, 1992『貨幣経済の動学理論—ケイ
ンズの覆桉』東京大学出版会。

[40] ——, 1994『不況の経済学 甦るケインズ』
日本経済新聞社。

[41] Rotwein, Eugene. 1976. David Hume, 
Philosopher-Economist. in David Hume: Many
sided Genius, eds. K. R. Merri and R. W. Shahan, 
Oklahoma: University of Oklahoma Press.

[42] 坂本幹雄, 1983『デヴィッド・ヒュームの
貨幣欲経済』『創価経済論集』第22巻第2-3号。

[43] ——, 1994『自己探究型貨幣論序説—ケイン
ズ貨幣思想の宗教的レトリック』『創価経済論
集』第24巻第2号。

[44] サンプソン、アンソニー、小林善訳[1986] 
1990, 「ザ・マネー 世界を動かす“お金”の

魔力」 テレビ朝日。

of Money, trans. Tom Bottomore and David 

Keynes, Volume. 2. The Economist as Saviour, 

Psychoanalysis and Keynes’ Account of the 
”Animal Spirits” of Capitalism. Social Research 
53(4): 549-578.

the Vulgar Passions. Social Research 57(4): 
785-819.

[49] 吉川洋. 1995『ケインズ－時代と経済学』筑
摩書房。

[50] 古沢英成. 1983『ケインズの貨幣観—「黄金 
欲」を現すべきか』『週刊・現代経済』（臨時 
増刊）第52号。